

金賞

活せいおでいのひみつ

野中 夏羽

八女市立矢部小学校

みなさん、活性おでいを知っていますか。活性おでいとは、よごれを食べる目に見えないび生物の集まりです。この活性おでいを使って、よごれた水をきれいにしているのが下水しょ理場です。

わたしは、どうやって下水の水をきれいにしているのかを、矢部川じよう化センターに行つて調べてきました。

まず、「最初ちんでん池」という所に行きました。この水は、まだきたなくて、くさいにおいがしました。

その後、いよいよ活性おでいとまぜられる「反応タンク」につきました。ここでは、いつも空気を送っています。理由は活性おでいは生き物なので、空気がないと働けないからです。

活性おでいには、アスピディスク、アルセラ、レパデラ、マクロビオッスなど、他にもたくさん種類があります。レパデラは別名ウサギワムシと言いますが、写真を見ると「二本の足のようなものがついて、それがウサギの耳のように見えるからこんな名前がついたのかな。」と思いました。活性おでいの中のび生物を調べると、それぞれ、下水の状態が増えたりへったりすることが分かりました。そして、その数で水の状態が分かるそうです。活性おでいは、よごれを食べた後、下にしずみまします。そのしずんだ物は、ひ料やレンガ、セメントなどを作るのに使われ、百パーセント利用できるとセンターの方に聞きました。活性おでいはよごれを食べるだけでなく、その役目が

終わつても、再利用されてむだにならないと感心しました。

わたしがおどろいたのは、それだけではありません。実は、活性おでいにいるび生物は、川にもいるそうです。川の石をさわったときに、ぬめぬめしたもののは正体は活性おでいにいるび生物だということです。だから、川の水で魚などの生き物がふんをしても、水がよごれたままになることはありません。

わたしは、じよう化センターでは、そのような自然の仕組みを上手に利用して、人間が出したよごれた水を、生き物が住めるきれいな水に変えているということがわかりました。わたしたちが見学した矢部川じよう化センターでは、活性おでいを新しく入れることもなく、ずっとそのまま使っていると聞いて、おどろきました。び生物が死なないように大切に見守り、川を守っている矢部川じよう化センターの人たちの仕事に感心します。

わたしの家では、じよう化そうを使っています。センターの方に聞いて、家のまわりを見ると、じよう化そうの三つのふたがありました。ここでも、センターと同じようなことをして、川に水をもどしています。わたしは、水をよこさず、大切にするために、シャンプーやせっけんなどの量を考えて多く使いすぎず、歯みがき中は水をとめたりするなど自分でできることを行つて、学校の校歌にもある矢部川を大切にしたいと思います。